



古今著聞集

十一

記 和 文

號 8 7

冊 20冊内

文庫





古今著聞集卷第十一

盡圖 卷十六

盡者五色之章相宜萬物之形其道  
容止可觀進退有度自想心遊蓋即閑  
中之趣也

南唐此賢... 葛亮... 產蕭何... 勳虞世南... 杜預... 張華... 羊祐... 揚雄... 陳寔



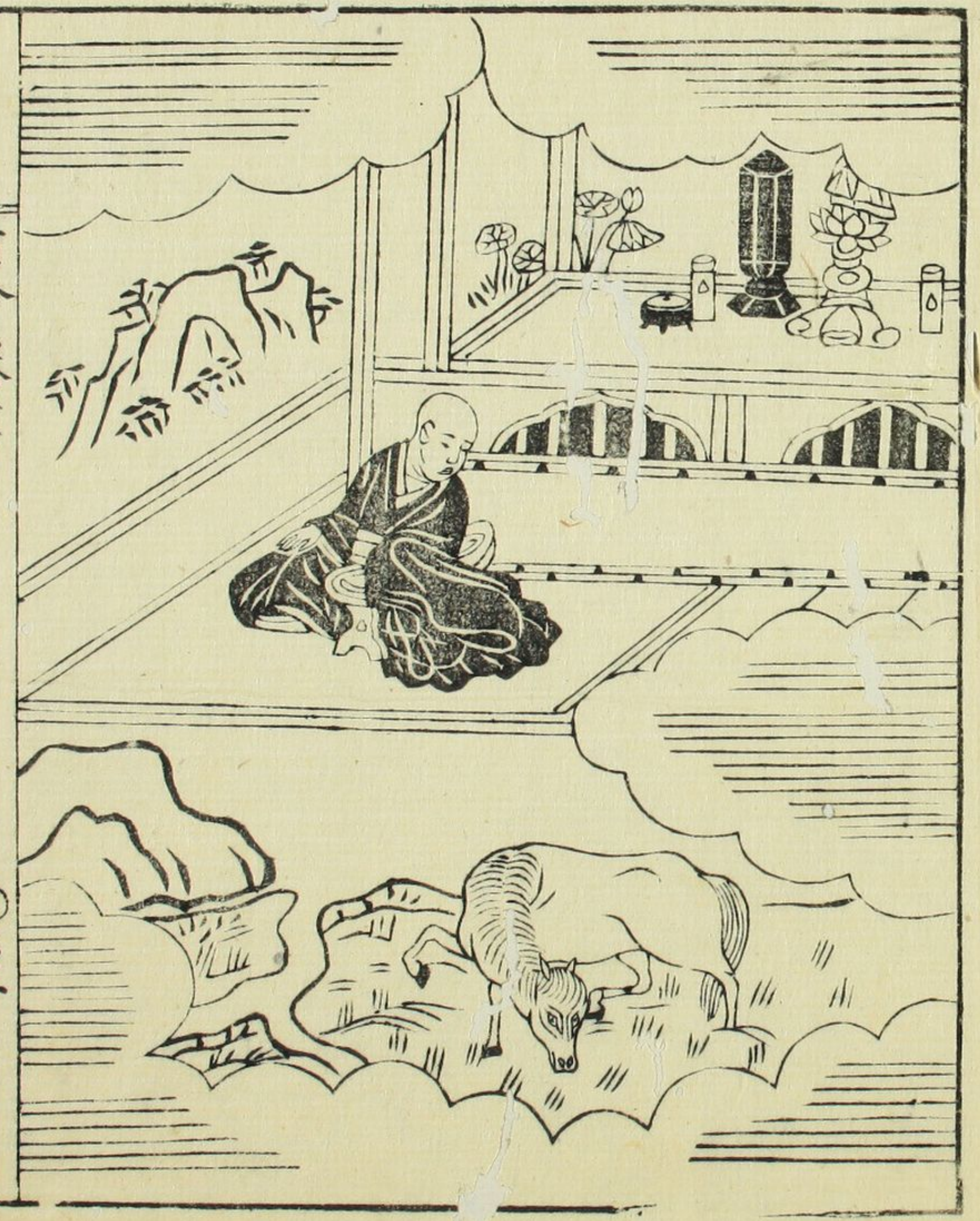
班固自三桓榮鄭玄獲武倪寬自二董仲舒  
 文翁賈誼叔孫通自西一史記人これ教とくれ  
 を彼蘇麟周の功長と譽せられぬるのむらさ  
 ぶゆやいと免る色紙形は紙張くれりきりされ  
 道風釣下れや文ゆえ七夜けがせゆり一載りも  
 沁りの清りありあまほきゆり一當何のみえ色  
 紙形ぐるりぞゆあり来え小宗徳の皇居帳に送  
 内裏ありきりにかんぬきの式にゆり一松皮  
 せ給りりくゆ紙は度ゆり一平巻くく一内小撰して  
 紫震信源宣陽校書後弓場陣座中一富順

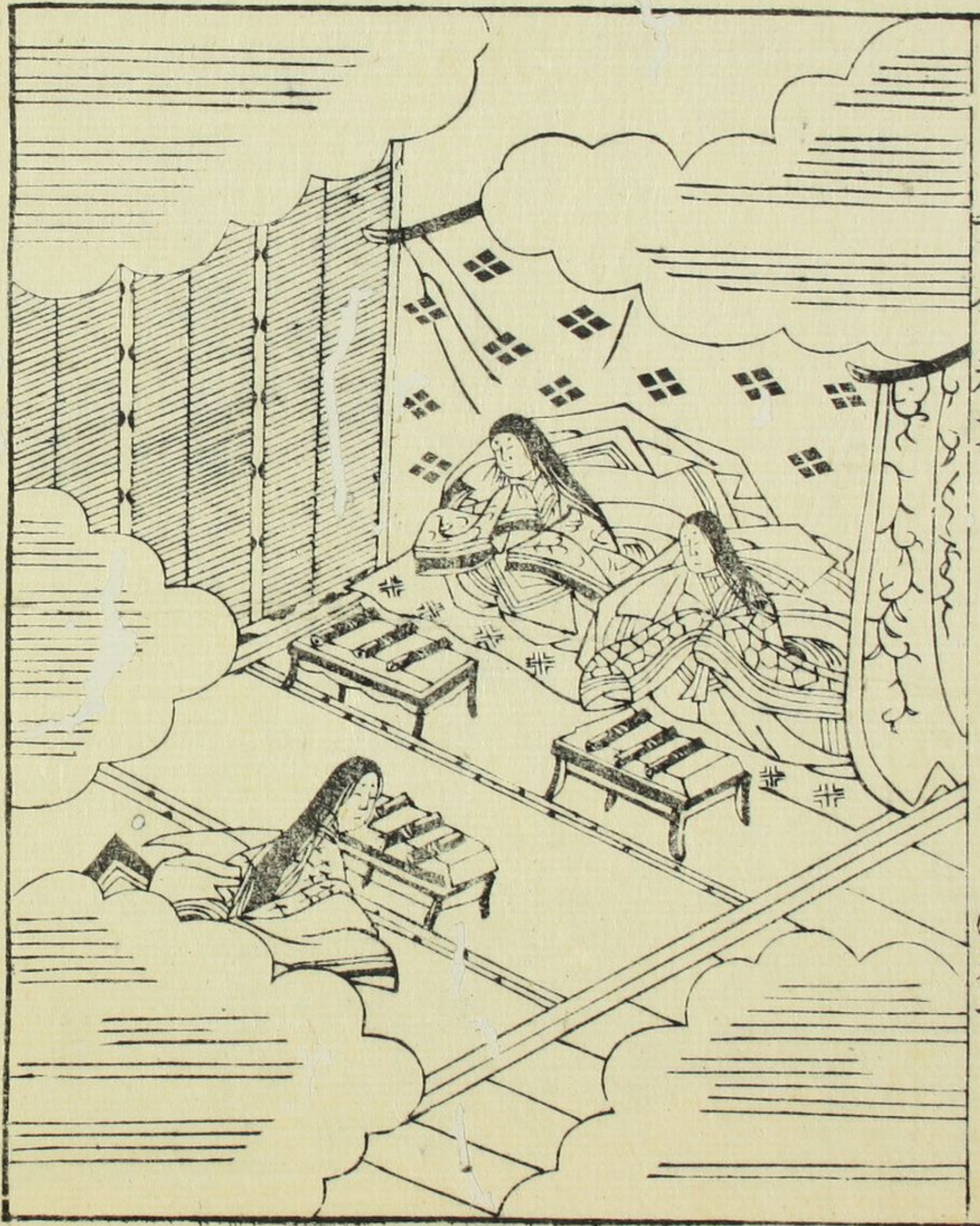
のあゝゆきそとれきゆいゆのの内裏れゆりき  
 而とぞゆいゆ池紙せとて一紫震後の弓教とゆめ  
 られたる何時長の教もりのきくも免られぬり  
 連吉れ造内裏の付ゆり又用後とくきあると  
 くゆいゆゆき一六内と一いゆ藤子とこれとありと  
 くれとゆき一の耐斗とてくれとゆいゆ秘義の優  
 けとるゆや連唐小宗徳よりのこれとゆいゆと  
 たりとゆりり一史記又鬼とれ壁よ白沢牛とゆれ  
 とゆりゆいゆ一はる小鬼れとみたる紙張くれり  
 あまくれりるもとらとてこれとゆいゆとゆい

あらび又後漢の弘治よりついでに倭子とてきて昆明  
 池を過ぎてきてよりそのころに冊紙きて片方に由形  
 わり又を唐国に書つらひある紙にけりともい雜書に  
 侍り倭織物と書く一おねの心を皮おねといふ  
 いたずらのやうにいとまろき網のおね事よわ  
 の大井は家紙かく倭織物と書く一を唐とてわし  
 く倭あそそふ姑のやけし入なり布倭子と書く酒の倭  
 子くみ侍て手長足長と書くそのやうに倭子に  
 の細代とまり倭の細子が極細子に倭子に  
 もん一そり一多院のころに書れりともいふ

この倭源後の唐徳小とこれ書かへせるの  
 侍り倭子といふ倭馬よせるの倭子とてまろき  
 倭子の小造物とれわれあり馬形の倭子侍り陣  
 唐の上小とて倭系が虎と射つ倭子とてまろけ倭  
 書かへ小書の中基が倭と射つ倭子倭書かへ  
 あれこれのまの西討つらやの事とてまろけ倭  
 うとてまろけ倭系倭系よ大内院のまろけ倭  
 るの倭子并よ倭軍書かへ倭子がまろけ倭  
 り倭子とて倭系の倭西討つ倭系倭系倭系  
 られつら付中倭倭倭倭トて起てまろけ倭

真の事いひ傳子の後平大勝君友の由念に傳  
 かり速長造内裏に記後平の形前の如かるる處  
 傳平とりこころをればおゆりてかせしむるなりじり  
 ばる那の傳子と念思り書りたりをかくしおれく  
 蘇の片は秋とくひおれが勅定まてとて成つたに  
 てる成書をまこれりておゆりておれどおゆりて  
 傳平傳りの後平のりきりまよや  
 仁おゆりておゆりてのりきり平法平の由念おゆりて  
 あり念思業とありひく後平は後平のりきりて  
 あり傳りておゆりておゆりておゆりておゆりて  
 あり傳りておゆりておゆりておゆりておゆりて





古今集巻上

三十一

くらひきりたのめとて心もつらあはれ  
 侍より程よ件のるは是かしら付ぬれとて  
 くらひきり及むる時人あやしくしらの  
 あやましくも舞ころるの目おとやうくあ  
 かりそれよりまのたけくありて田舎の  
 とてぬりりきり

長山は皇書字と人の徳をわうまびあはれ  
 後師とめいごうは出ぬの海をたぐひは  
 毒のちた後師とらあまよぶあつとよ人  
 泣うくんそえとねくうりせられきの

古今集

三十一

ひびき地うごたえねては望むごとくは  
 きほひん成るべくそは性非がわら成るは  
 まふあよあいのふり作こし中されねど  
 信あをせほひより極ひびきの成れお  
 かりきる成後所及わしそわらきる成  
 ありきりそんごよ筆成わしけしき  
 ありと毛おしく思つそりきるわら  
 かん付えねてこれ人ふりそり人  
 きほそんのか今よりこのやれ成る  
 ありと成ん

弘く地獄爰に屏風とキるに橋の上より挿し  
 きりありて人成りぬる鬼を書りきほが  
 こは魂入くそは成とけしひきほおそ  
 くれ我運命は成とけしけしけし成る  
 たりと成る 具平 成堂おし成るは成る  
 役をどよふ今に成る成る今に成る  
 づき半に成るそそ自覚しけし成る  
 思が成る孫成が孫深江が成る  
 書る成生し成るの成る今成る  
 成る成る成る成る少年の時成る

古今卷五

四

後小還信志るるのこゝ飛とあそねくまのり  
 千新の石細とて書て依書たけりくあん脚の  
 おとよ屏風と書人よをりて飛弘志るあどり  
 足せりきせりて飛弘志るたまひてそいひて海いふ  
 聖徳太子松海及てうべおそくくひて書あひ弘  
 る飛依しきりて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 必その屏風のむのいひておとよのまが飛弘志る  
 あらういひて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 せりいひて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 小野宮のむのいひておとよのまが飛弘志る

常則と書あれど他りあてりきりてうべとて  
 飛と書あてりて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 足せりて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 ぞやと書あてりて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 同様と書あてりて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 定治屋修りて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 了と書あてりて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 修りて飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 あとておとよのまが飛弘志るあどいひて書あひ弘  
 成光軍師の修りて飛弘志るあどいひて書あひ弘



て蹴けるやなんいぬ光ハ三升る偽真義が書子  
ああん竹々り

終通後師良親小屏風二百帖小後をませり  
々りも伴坤元源屏風とら良親お侍れ事  
あん書竹々り大お所まのり後々の時二条あり  
まのくせをせてんがり也哉形ハ口系大綱をそわき  
きり文ゆ文あぬと一そく川されたり西平ハ一の介  
お侍のお小侍に一そく又和漢抄ハ屏風ハ中巻  
水と書上小唐法とわに下に中巻と後をませり  
さり唐法の屏風ハ突花つ之よりなる紙如章

小治劫一ふきゆとそ

永兼八年四月六日藤原景房如御小治合ありあり  
跡生の十日わありの比よりそゆをまをゆいまの  
のほせくふくはよりんつひあぬいそまをまの  
よゆせんをまをまじりよりそあゆむ花合ハ散  
てあるに極よくりぬきごゆゆひあ一そ合ハゆ  
てかのまを一ゆれハ名跡らほにそ林とるふあり  
よりハ万葉集までハあ病もまよりん今後探  
ホ青柳のいとくりもみまもあゆむ紅紫の錦  
そあゆむいんもあゆむ色もあゆむとそあて

おれあつたよふ人と後小書々令ききりあへ  
 の舟のつらねよそく今れと系の儀う海をた  
 らんめづりくちをそつおらとつねたり野の  
 花月ふらん作りをるい比六郎とあどこそわんを  
 大庭れお金の部小竹きととてきふくきり  
 の横伊勢大橋な事の命婦ぞ精作くお房二十人  
 十人つとつらく名経く人紙傳くおゆてませ  
 かり寝屋の東島の母屋成成上ま戸の成中源  
 大綱云 昨房 中野文申綱云 実平 左衛門 隆西 三信  
 侍候 春平 新中綱云 信忠 申文信長 信輔 右平 信子

るごそきあつたれくろあ上人はくくべるのさめ  
 ころちりおれぐと赤よりおんおつとぐれ八五人  
 川つそそあな海西屋の内おの面をておたり  
 あでしこぐさひ右殿が所ののちとあんさ信たり  
 のまおおよあおれぐとてつきのびまひおあ  
 れおとびとてあつとねとえらをちえお今れ七  
 ねわつしきおおののれさじつね入りお後  
 さあくおおざりおたりおお眼信表の物とんきり  
 おおと信よりおたりお金の剛信おとての  
 たりとつらくお山小書をゆくうとておのち

一しゆのまぶさくおあやうもやうに候縁後ありた  
 うん海女を福の福けけりうの透籠けけおきて  
 後のまじり六帖わすじしゆ海の子一帖を八表候の  
 海女へくちなり打敷三藍のまじり白と文とぬひ  
 う海女への金の剛濱よ金の鶴わぬをまそり  
 十とせつとまきるとのふとろかぐ一敷あつあつ  
 らづてひまぶさくおあやうもやうに候縁後ありた  
 とあより目測書ねれば二帖さうあつ小君さうり  
 ち長ぬいつしゆ海女を福の福けけりうの透籠けけおきて  
 わん海女は候縁後ありたのまじり白と文とぬひ

一しゆのまぶさくおあやうもやうに候縁後ありた  
 うん海女を福の福けけりうの透籠けけおきて  
 後のまじり六帖わすじしゆ海の子一帖を八表候の  
 海女へくちなり打敷三藍のまじり白と文とぬひ  
 う海女への金の剛濱よ金の鶴わぬをまそり  
 十とせつとまきるとのふとろかぐ一敷あつあつ  
 らづてひまぶさくおあやうもやうに候縁後ありた  
 とあより目測書ねれば二帖さうあつ小君さうり  
 ち長ぬいつしゆ海女を福の福けけりうの透籠けけおきて  
 わん海女は候縁後ありたのまじり白と文とぬひ

卯のむさける玉川の里

くろくけりぬいぬびにたりてひらきともの形に  
きぬとも

金象撥面の法ハ清て久くぬらんが志する人か  
しニ乘を 教道 作ききるらん 金象撥面の法作らる  
とぬく珠と打物 金象小珠とて舞するもまご  
良道ハ撥面ハ之の法作らるしぬきき海と  
なんび事ハ中物ハ作らるし金作らるし  
良道ハ撥面ハ作らるしぬきき海と  
きぬともぬりしの法作らるぬきき海と  
きぬともぬりしの法作らるぬきき海と

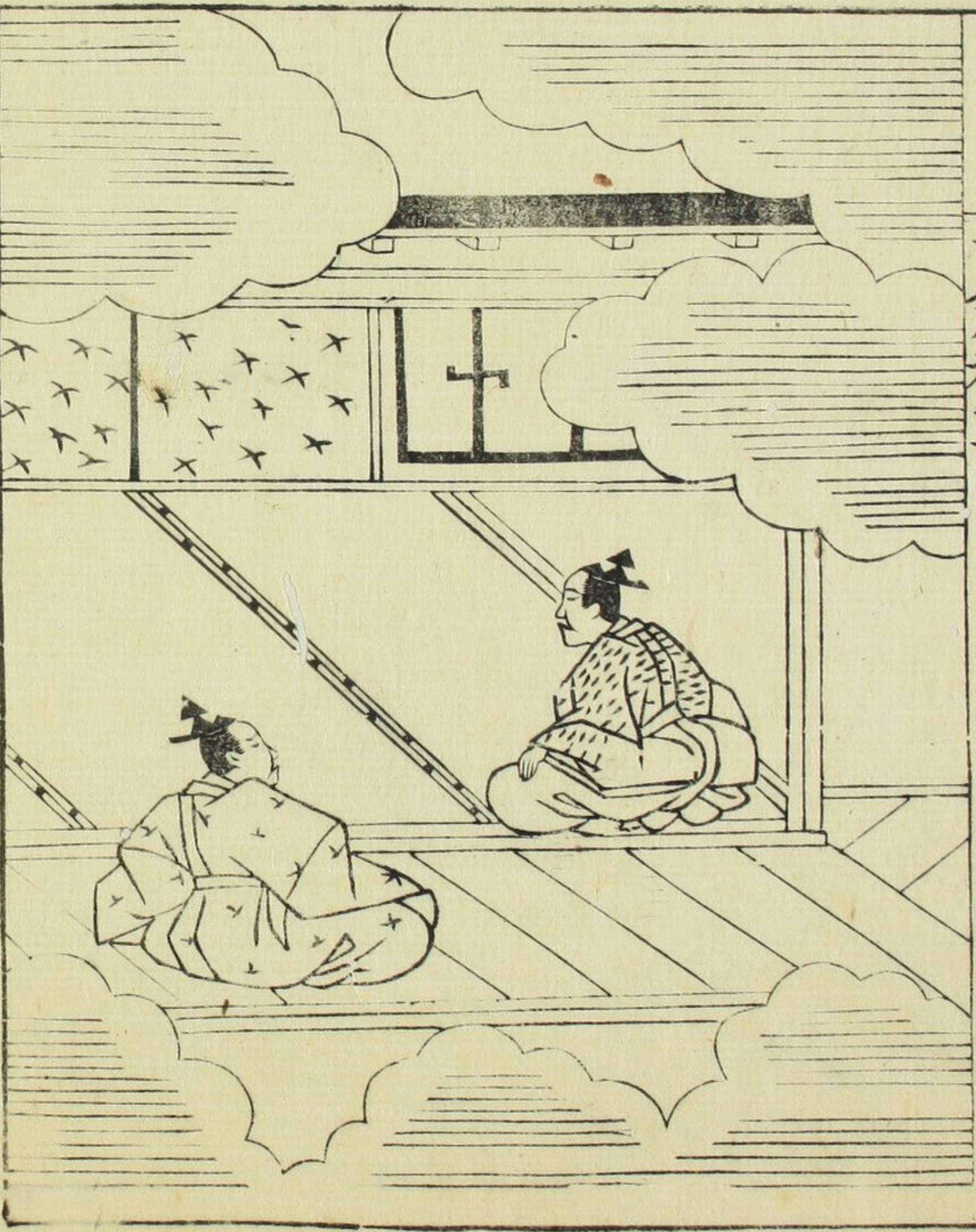
りり後言念院中付孝道 邪下 勅定 中よりて比巴と  
造を 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
とて孝道とて中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴

も相傳ふハ中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
金堂の扉に繪きし人ハ中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴  
中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴 中物作は比巴

あがふと大菩薩法師ありて... 法苑珠林の法苑珠林...  
 と難くあつたり人々法苑珠林の法苑珠林...  
 たりて法苑珠林の法苑珠林...  
 法苑珠林の法苑珠林の法苑珠林...  
 法苑珠林の法苑珠林の法苑珠林...  
 法苑珠林の法苑珠林の法苑珠林...



古今卷十一



傍の草も然りきりけり後傍に寄る處  
 やあつれたるいりあもして先はなむんといひ給ふ  
 或附伴の信人れいさうひと標方おもゝ実合る  
 と平く目<sup>に</sup>見<sup>る</sup>ていぬ<sup>る</sup>きりは信人れに結ぶま  
 らぬる力せむる人ごりあつてあつていへ  
 どのの給ひをいへり信人れはよくとていひい  
 物と人とは貴は奉<sup>ま</sup>りあつて貴人れに  
 さい<sup>と</sup>いふ海<sup>の</sup>中<sup>に</sup>はいへりあつていへ  
 さい<sup>と</sup>いふ海<sup>の</sup>中<sup>に</sup>はいへりあつていへ  
 信人れもいへりあつていへりあつていへり

その中これの後の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を  
もとては信の書の中へいふは信の心を

後白河院の時中平の事成後ふくれぬ由書状の  
わまりにねむくをせきさうきりあゆむに洗とて  
僻ひがりあるふく小押紙とてそのあやまりは目  
毫もくさる一つさへも進まされたりと信紙法皇  
は洗とて信紙書なりとけりつた勅定よこの人  
れ目業小押紙とていふとありまてし繪をかき  
とるりありつとひさふありてし信とて小書室と  
成とてとて蓮花法皇の御書とてありたりなり  
を押紙今にありていふとありとて事一  
同此時信うん難房がといふ地とてありたりとて事一

後あそくあつた難儀見のたりのこり或時梅さ  
よはたの事つゆ後中よ人の女は川島に女  
とあひくゆりやとる辨海にのりて  
かやうく又男のこおとるあつたつて  
と切つるは法皇の作とて給難儀も力なり  
物とて而たつて足さぬれはよくして目  
ハ書つて難儀つひあれはあひて家女は首  
ハあつたつての事つゆりよつていさ  
そいぬはあひくいん混善か通つり新小入とて又  
切つる男目も交作られたのたもあつて切

のこりよ只今らり事あつたつて新小敷に  
りかあつたつてこれあつた難儀つては  
作つた事もあつて後とおもつたつて  
作入通の事つてはつて書つたつて  
ねまふあんあつたつて新下に切つたつて  
中門の廊の壁ふつたつての事つて  
あつたつて書つたつて新客入難儀つて  
忘わすれつたつてあつたつて新客入難儀つて  
とあつたつてあつたつてあつたつて  
まのあつたつてあつたつてあつたつて



事が書てゆやいれられぬいやくて天竺骨と  
いそ城のいそい事制一宿りま海ぐりよとねんい  
く海をゆきとく法みしとる人あり

東方も信書の時種余右大の上海をまら法皇  
より西宮の法皇とよぬとされく宮東ゆあり  
かくてそゆり先んて法に作つたされま  
とる城幕下とされたり西の法皇と法皇とい  
てう形が眼とあてゆきとて思とゆて一見も  
きで返上せりまふたれ法皇の定と具よん  
と思ふよりまらに存中あぞお合されたり

法皇御代は昔信書人とも誠とまらりせ給くゆわ  
まらにゆきよゆ事ありとて法皇御下と作  
まらとまの御珍おかせられたり八条に長光  
の筆もあなれと長めく信書一法より目録記  
すまふとぞゆし今法皇の御代ゆきとまらゆき  
ゆわらまらとらりあり実ゆありあり

順徳院の法皇の時ありしき西院置れまふとら  
たり名御はゆきとて人孝則風信権る  
系の名并ふとまら御の中ふとありねん  
ハハるまら物定まられど別法とまらり

小大もの入りも多しとあれどもてこそあつたてを  
 各よはせゆりよとてて後んら此後小くまんと志  
 々の時をもくいさの海うみなるものぞ推がかり  
 せしめぬとせむれや人ありきるん源大納言しんげん  
 住持ゆえきまりきりけりもの通とほるもは同どう前  
 ありおそしむるゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 てまゝせぬりきりゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 ぞゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 家持のまかりゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 あり一とまかりゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

してこれよりゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 人ありきりゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 孝道こうどう下小ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 やり大もの羽小おれゆへにゆへにゆへにゆへに  
 やりゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 ありゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 ともゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 後のちゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 路ぢゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに  
 藤ふじゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

古今卷十一

十四



ゆつめわいれりる事

同此耐似捨と申好ありきるに水面下藤田屋をよみ

親と云京控を更信実下と考りてかせしきと云に

大更耐承親その振ともあてとてあてり白旗とて

水面よしき海が考りてあこれ考耐を方ととりてと云

と云りて考りてあてりぬんみえ侍りる

法那大陣は法眼受考が考子にふりてと云りて

法那と云考りて考りて又逝去の考ら法那とて使考

お編の考と云考りて法那よ法那をれと考ゆと云

と云るに法那法那と云りて考を考りの考と云るの

法那が考りて法那考りてと云るに法那考りてと云り

と云るに法那考りて法那考りてと云るに法那考りて

と云るに法那考りて法那考りてと云るに法那考りて

と云るに法那考りて法那考りてと云るに法那考りて

と云るに法那考りて法那考りてと云るに法那考りて

と云るに法那考りて法那考りてと云るに法那考りて

と云るに法那考りて

一條考法那考りて法那考りてと云るに法那考りて

と云るに法那考りて法那考りてと云るに法那考りて

備中守の範小作と修ねせしむるの宣見えとて十  
 月廿七日の御しるきりつくりありあつたき先  
 られり寝殿二棟の障子よりついでに唐紙八雲念之とて  
 平重宗の御しるきりつくりとて二条宮白飯長者ふ  
 てかりしきりつくりとておしりつくりとておしりつくりと  
 くの障子とておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 出座殿代読了れりよもておしりつくりとておしりつくり  
 障子の御しるきりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 せりつくりとておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 けりつくりとておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 けりつくりとておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり

大座の御しるきりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 とておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 ておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 座の御しるきりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 ておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 けりつくりとておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり  
 けんつくりとておしりつくりとておしりつくりとておしりつくり

蹴鞠 卷十七

蹴鞠の選擧る前なる壯烈之文武天皇太實元年  
みづ無始よりをゆとや白妙之上塚樹之景二六  
射凍反翼お忠感真難慮考く

後二条元二月の比白河の御座へ事終く蹴鞠の令を  
多の志がーみそくみのみそく御座を解せしめて  
片の前後の事終れ蓋は御座を解く事終おゆ  
終く日陰の乃れ蹴鞠よまそく御座を解く事終おゆ  
ゆりまて日陰の乃れ御座を解く事終おゆ  
よまそく御座を解く事終おゆ

まろひくありまろぐまろひく蹴鞠の令を  
より多の志がーみそく御座を解く事終おゆ  
よまそく御座を解く事終おゆ

蹴鞠の令を解く事終おゆ  
まろひくありまろぐまろひく蹴鞠の令を  
より多の志がーみそく御座を解く事終おゆ  
よまそく御座を解く事終おゆ

蹴鞠 卷十七

蹴鞠 卷十七

持度濃色の二衣字をそよひりよせられたる大ぬえが  
しそや作られりゆく装束にそよひりや思合まのり  
まゆしそ

持度大納を成通の鞠ハ丸まればさよあわぶらり  
はは作れバ鞠を好すのらむに下まら七有  
その中目せうべと西まら二子目は病ま向ハ外  
あぐ鞠と足あわて大ぬの時ぬ大松屋ふゆさ  
あまぬけり千日のそよ此日川はくろひく教言  
わありわげくあぬえたよえんが鞠はらりて柳を  
二まらけく一の柳は鞠と玉一の柳ハ中りくの徳ふ

とあふまらく帯下とそよみぬ川の帯を  
わて鞠成れば丸まればと装束はとく勅命を  
二秋の後の終と名ありあ秋は事終て福と賜  
うろしそ人あ八櫻紙前祇侍の書ハ装束と名  
半そそく人かての装束おんそよの紙にせん  
て灯臺とらりくそよを装束する時柳ハ玉一の  
まら前ふまらひてあそねやそよ中らそよ  
程は形ハ人あそよ足ハ振そよ二四葉はあ  
わらぬえ人あそよわらひく鞠のそよあそ  
そよあそゆそよひつて荷物そよわらひくハ鞠

持度濃色の二衣字をそよひりよせられたる大ぬえが





へまのくが後羽めをぞよづこひみ海のりくま仕八侍  
 めへ仕庭鞠ハは好ゆきりもまをぬきしつりま仕八侍  
 事の中今うり後ハは海物ありとほあめあがりうけく  
 おりままをいばまをりとかまのそて馬鞠まもりく  
 うくおしあくせんま海といふ程ふを飛ぶてまあり  
 きりまびあひはづらる鞠をうらふりやうらといひあ  
 ざしあさうと云鞠の性ぐ額の強さをあわらうま  
 侍ありまどくび大納をれ鞠よ不は候あゆり  
 或河侍の大盤の上ふ常公をたあがうのぼりて中鞠  
 とけしきさるに大盤のうらふ常のたふ候あゆり

ふらうせざりきり鞠のきり侍あつた大盤のうらふ  
 只常とまんとさうまのまどくまうてまをと蹴てまの  
 まあらうせぬきりあまのまどくま又侍七八人と形  
 べ飛さそく端小指のあうりは常小指と踏て出せ  
 うたあうらふまりとけしきさりまを侍は法師ア  
 ちまうていこうり度て頭とあまそと蹴まをま  
 かくまら申つあなとりてまうり候きりていふまあ  
 ちまのれたれバ肩小指常のあうりはまはまははら  
 常小指小まどくは常あそまははらあまあま  
 信那ハ又平登とまうり候のうらまていづるまあ

三合巻上  
トモリ又ハのよがりて清めお小舞くまてうき居は  
常葉の字桐と出たれあぐる悔りつて鞠汰けんせ  
あふお移付て刈あよりあ(蹴)くりうきり又立御  
あへくまきせねで思るりあの日紙がうろく一多紙失  
きり馬のほほくけり中よる抱やハあるとそ舞  
そてさせて追出しく一月中いよをくまごりきりそそ  
又慈那(舟)のけりうろ常の後うろ鞠汰くまけり  
おあより百度あより百度二反小二百反とあげて  
きりきり鞠汰くまあごりてさああはあふしこれ  
き居るあよ別高常候とれあはる者たいまりそ興

してあああひうろが別あひそわくごりけるに徳以  
まのくせざらんそくおだのあそつれきせりあそあてん  
あまうろくおだのあそよんさそり御とりにあてそり  
あこりきり又ハの坊門の徳の下にまをれりね車  
あわりさる瓜片あふして鞠のまきまをるに車は  
あくあびくくすま鞠とわくそるに大納言我り  
まてそハおとるぐくはそそまらうそくまこれまに  
あハのねのくま鞠あたりまらうて定あおあより  
くれれ鞠の方よりうろりあそあにまらあひく  
あされたりだまらえのくまらああらんとそく

へんの尾のくまうり走らざりて越へぬへきなり  
 へくねらうとのこり何やうかたなりありきり  
 見<sup>見</sup>見<sup>見</sup>せられくまの程のまればこそかきまじ  
 半わづれとぞいそれなる鞠をそくれ後車か  
 あどく何りあんやとぞあまをれを車室  
 くらぬとぬ引かてとくともみふあぐえの方と  
 小あしてあてしうはなまはなまよとと越えき  
 きりたよ威<sup>威</sup>どて障<sup>障</sup>たききりまじくさぬか  
 へわりあてし半のこまきりけよまうり瓜たぐ  
 わくも半あての人もいさうと海よりこりきり成

日まら瓜たぐく何げくま毎りきりはは風の物と  
 わづらやうに著<sup>著</sup>鳥<sup>鳥</sup>けりやのこる程りそに上り  
 てまの中ふくくはなてとゆりまきりあはれ  
 き<sup>き</sup>心<sup>心</sup>こくし半<sup>半</sup>屋<sup>屋</sup>あはれり一<sup>一</sup>葉<sup>葉</sup>木<sup>木</sup>ふまき  
 とぞあれもはは佛<sup>佛</sup>よ載<sup>載</sup>りり又大<sup>大</sup>細<sup>細</sup>をそのか  
 佛<sup>佛</sup>とぞし佛<sup>佛</sup>と遠<sup>遠</sup>くをてぬれりきり時  
 の玉<sup>玉</sup>屋<sup>屋</sup>とわけく格<sup>格</sup>子<sup>子</sup>れりやなとせうけくま  
 多<sup>多</sup>れ<sup>れ</sup>成<sup>成</sup>道<sup>道</sup>のまの若<sup>若</sup>りりきりななまき  
 きくまら心<sup>心</sup>がまうり格<sup>格</sup>子<sup>子</sup>と<sup>と</sup>屋<sup>屋</sup>との<sup>の</sup>甲<sup>甲</sup>ふ<sup>ふ</sup>入<sup>入</sup>る<sup>る</sup>心<sup>心</sup>  
 つとえ飛<sup>飛</sup>入<sup>入</sup>る<sup>る</sup>まを心<sup>心</sup>が父<sup>父</sup>の<sup>の</sup>骨<sup>骨</sup>ありきま

まゝとて是よのせてその極處とすまゝにせしめ給はれ  
 せどりうのやうに飛くことしてりきり九丈れあまご  
 小あつらりきり家つねよひまんごうごりの度あり  
 こそ自極せしめたる大くさい大納言はくごうごり  
 ともまごご好給く藤氏のもうごうの捨捨は  
 中とまごごうられり又度の上ふ外て探りり  
 ひく新めての安産せしめおもまごごり又の制止  
 せられ大くあつらひまごごり相傳はあてつ制止  
 ままされどもおやごごりさればおあふまてはつら  
 このむくゆる給はるやうにたすれをさうしつ給は

といふは洋船のるまごごりあつらひの極處一人  
 ろのまごごりあつらひ一人をまごごりて車れまごごり  
 りらあつらひのりね何車の輪とあまごごりあつらひ  
 小なるの務とあつらひあつらひとあつらひとあつらひ  
 又よあつらひもあつらひあつらひのあつらひとあつらひ  
 とあつらひの制止ありきり  
 定府は府は城とにまごごりせしめ給はるりきりあつらひ  
 宜成房よ作く四立まごごりあつらひあつらひあつらひ  
 きりあつらひ某鞠二まごごりあつらひあつらひあつらひ  
 ひまごり二があつらひとあつらひあつらひあつらひ

此の川へ二重鞠めてトさるる成た府中を足邊とく  
 二重まうりさり事か見ん之を鞠とあづつきやうりを作  
 きまねん別件ひまや成上るたあに夜何うりて枝り  
 わりりてうけぬあれをみるにあらぬまうりれよふ落さか  
 ことおほひつりきんた府中たきのおとあ人けあ  
 みそ成たよせえゆらんごるに実よ二重こりおと  
 頻りあまうり感かんじ流ながるこしかりん  
 安元御ご勢せの耐た之位い輕かろ捕とらえ茂しげ御ご平へいが家  
 より向むかへゆかたれ上あまりはつさうり御ご定じやうみとる  
 の子こ和わ洲しゅう税ぜいとわらふとといふれたればあまのい





中より仕立大由客の鞠つう海川あ半あよひの  
 雲よりうつひ但帯れ老とうれ人のわけ鞠のてい  
 そゆりあさりきり又らあてふかものふ門をさしてこ  
 是けんといふありあふ云快あまよの鞠は七十の後三  
 そくれ上鞠を者トあんとり又彼あくと人あがふは  
 あひさせんてあつてあふ云さて能より鞠は六ひり  
 是つといふの云おあ通お下ふゆづらんどもあふ  
 ことあふ内くちをさるるわこあふをあふくとも何  
 ううううん漢あ入たれあふあくと能とわの能との  
 事ふおははた酒云また酒云れあふあてあはりのあが

ちかき遠くくびとぞいそれたるあまのそとにも申文とつり  
 けくさるゝあまのそとにせまひこゝるん可おゆるんと  
 ぞいひまふ

治承二年三月廿四日方たぐへのくまよ流所七糸  
 五よりり音もそは日由臺あくゆまのりまをりま上  
 麓中ふまうそせおりのきり内太長下ひらびり  
 あそかろ海せ給るる法皇は付衣あく遊させおりのま  
 一そまにふたりのせくるるゆれもあくまをるあや  
 形に頼備下赤かぶぶろそそまのりまをるゆれもあ  
 ちかきと頼備下赤もめされりまをるこまやめづりし

くまのあまのそとにせり

後鳥羽院の御翰教はあまのそとに治承二年四月七日こ  
 れらの長者と厚くまをるまは按察使奉進の前、法皇の御  
 衣下、有る御雅給下、暑く表紙まのりまをる

順徳院の御翰教はあまのそとに治承二年四月廿一日の御  
 衣下、有る御雅給下、暑く表紙まのりまをる  
 上朝仕よりまをる御衣下之御雅給下赤帷まをるまをる  
 ちかきと頼備下赤もめされりまをるこまやめづりし

治承二年四月廿一日の御翰教はあまのそとに治承二年四月廿一日の御  
 衣下、有る御雅給下赤帷まをるまをる

雲霧<sup>くも</sup>移<sup>うつ</sup>る久<sup>ひさ</sup>継<sup>つ</sup>ふ<sup>つ</sup>く切<sup>き</sup>立<sup>た</sup>せ<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>常<sup>つね</sup>に<sup>に</sup>出<sup>で</sup>翰<sup>たね</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>  
 小<sup>こ</sup>瀬<sup>せ</sup>より<sup>り</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>れ<sup>れ</sup>毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>侍<sup>しやく</sup>り<sup>り</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>た<sup>た</sup>長<sup>なが</sup>た<sup>た</sup>長<sup>なが</sup>あり<sup>り</sup>  
 好<sup>この</sup>ひ<sup>ひ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>な<sup>な</sup>長<sup>なが</sup>御<sup>ご</sup>り<sup>り</sup>北<sup>きた</sup>上<sup>かみ</sup>ま<sup>ま</sup>み<sup>み</sup>より<sup>り</sup>く<sup>く</sup>疎<sup>そ</sup>て<sup>て</sup>物<sup>もの</sup>葉<sup>は</sup>  
 の<sup>の</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>者<sup>もの</sup>長<sup>なが</sup>の<sup>の</sup>長<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>  
 と<sup>と</sup>俊<sup>しゅん</sup>直<sup>ぢく</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>下<sup>しも</sup>緒<sup>もと</sup>に<sup>に</sup>西<sup>にし</sup>指<sup>さし</sup>貫<sup>くわん</sup>ふ<sup>ふ</sup>阿<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>切<sup>き</sup>  
 ま<sup>ま</sup>へ<sup>へ</sup>緒<sup>いと</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>真<sup>まこと</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>あり<sup>り</sup>  
 時<sup>とき</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>あり<sup>り</sup>

古今著聞集卷之十一





